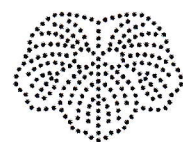


「リゅうま伝」は高野の分身がお客様のところへご挨拶に伺う。という気持ちでお届けしています。



リゅうま伝

第80号

2026年7月26日

高野竜馬

「流星ひとつ」

幼稚園くらいの時だったでしょうが、テレビに出ていた女性がとてもキレイで、ドキドキしたことがありました。

それが藤圭子。今の人には宇多田ヒカルのお母さんと言った方が分かり易いでしょうね。

「この子、可哀想な子やろ？」親せきのおばさんが、そう言ったのもよく覚えてます。

その藤圭子の芸能界引退の真相が描かれていた「流星ひとつ」。沢木耕太郎が書いたインタビュ形式のノンフィクションに感動した高野です。

藤圭子が引退した28歳の当時、そのまは出版されていたら、とんでもない話題作になっていたことでしょう。

今読んでも内容は衝撃的。それかという訳か、完成した本を読んで、著者である沢木氏自身が「藤圭子を利用したのではないか？」という感覚に襲われ、発行を見送るのです。プロの作家が、そんな決断をするということも驚きですが、なんとそれから30年以上封印するのです。

そして、藤圭子が亡くなり、「もし『流星ひとつ』を読むことがあったら、宇多田ヒカルは初めて藤圭子に出会うことができるかもしれない」と発行を決意するのです。

貧乏暮らしの中、盲目のお母さんを助けたい一心でデビューを目指す藤圭子の姿に胸が熱くなります。そして周囲は彼女の生い立ちを売りだしの材料にします。浪曲師の両親とのドサ回り生活。上京してからのネオン街での流しの生活。本人はそれを大した苦労ではなかったように語っているけど、それがかえって痛々しく何とも言えない気分になります。

また有名歌手やプロ野球選手との色恋も赤裸々に語られるのですが、ゴシップ的な面白さではなく、職業人としてのプライドや人間本来の純粹さ、選抜の美しさ、この人の言葉の端々から見えてきます。

またたく間に彼女の歌は一世を風靡し、「演歌」ではなく「怨歌」と評されるのですが、28歳で一度引退、渡米。後にロックやR&Bに目覚め、それが宇多田ヒカルの楽曲へと受け継がれるのです。

奇しくも同じ28歳で「人間活動をした」と一度引退する宇多田ヒカルは何から何まで

お母さんとして、くうなのにも啞然とします。

最後に「珠玉の一文」は、あとかきよう。

「美しかったのは『内容』だけではなかった。『心』のこのように、すすぐな人を私は知らない。」

純粹で、流石人生のように生きた女性の素晴らしい物語です。



たかの財形事務所

〒819-0374 福岡市西区千里 707-13

☎090-3407-2123

・ <https://www.takanozaikai.com> メール fp.takano@gmail.com